

第 26 回日本木材学会九州支部大会報告

第 26 回日本木材学会九州支部大会
運営委員長 雉子谷佳男

第 26 回日本木材学会九州支部大会は、令和元年 9 月 12 日（木）、13 日（金）に宮崎市民プラザで開催されました。研究発表は、口頭発表16件（フェーズIが1件）、展示発表が19件でした。大会および懇親会への参加者はそれぞれ72名（一般51名、学生21名）および53名（一般42名、学生11名）、要旨集への広告掲載企業は16社、公開講演会では約100名の参加があり、盛会のうちに終えることができました。ご参加およびご協力頂いた皆様に心よりお礼申し上げます。

1 日目は、まず展示発表から始まりました。19 件の発表のうち、九州各県の公設試験センターからの発表が 5 件ありました。公設試験センターの発表比率の高さが九州支部大会の特徴であり、活性の源になっています。発表内容は、材料性能から分子レベルまで多岐にわたりました。展示発表の後には、1 件の口頭発表（フェーズ I）を経て、恒例となっている公開講演会（九州支部研鑽プログラム）が開催されました。「未来の木材利用を考える」というテーマのもと、3 名の講師の先生に講演頂きました。1 件目は、国立台湾大学教授 Chun-Han Ko 氏による「台湾の農林業廃棄物再利用政策から生じるバイオマスに基づくエネルギー供給の将来性について」です。台湾に求められる 2 つの課題、すなわちエネルギー問題と地球温暖化防止の両者を解決するためには木材自給率の改善が重要であり、そのためには台湾林業の復活がカギとなることを予測モデルで解説されました。台湾の人工林は日本から持ち込まれたスギが主要な造林樹種であるため、九州のスギ林業との連携が期待されます。2 件目は、山佐木材株式会社会長の佐々木幸久氏による「木造建築時代実現のために～材料と構法開発、担い手～」です。木材業界のトップランナーとして活躍されてきた佐々木会長の長年にわたる実績に基づく講演でした。大断面集成材と非住宅木造建築(中大規模木造建築)事業への取り組みに始まり、CLT への取り組みや超高層ビルに木材を使用する研究会の発足について紹介頂きました。木造建築時代実現には、材料と構法の開発と担い手の育成がカギとなることを述べられました。3 件目は株式会社山下設計の岸野泰典氏による「CLT 耐力壁を活用した宮崎県防災拠点庁舎の設計」でした。環境配慮型建築（Green Building）は世界的な主流になりつつあります。宮崎県の防災拠点庁舎設計にあたり木質材料を耐火上どう取り扱うかが課題であり、CLT を地震時のみに抵抗する耐力壁とすることで、“あらかし”での使用が可能となったことを示されました。「宮崎県防災拠点庁舎」では、鉄骨骨組の中に木質材料（CLT）を耐力壁として配置した新たな構造システムであり、実大実験に基づく解析モデルを用いた安全性の確認プロセスを説明して頂きました。同日行われた懇親会では、本部からは船田学会長にもご臨席賜り、ご挨拶をいただきました。また、参加者の皆さまには宮崎県の郷土料理と宮崎大学プロデュースの本格焼酎「薫陶（日本パッ

ケーシングコンテスト最高賞受賞)」を楽しんで頂くとともに、公開講演会講師の先生との交流を深めて頂きました。

2日目の口頭発表（フェーズII）では、前回大会に引き続き、高校生による発表がありました。研究発表終了後は、総会ならびに黎明研究者賞の授賞式が行われました。九州支部では、毎年、支部大会において優秀な発表を行った者に対して黎明研究者賞を授与しています。今年度は、口頭発表部門では「モウソウチク当年稈由来マイクロソーム膜画分におけるコニフェリンおよびp-グルコクマリルアルコールの輸送」と題して宮崎大学の島田菜津美さんが、展示発表部門では「モウソウチク当年稈成長過程におけるキシラン、フェルラ酸およびリグニンの分布」と題して宮崎大学の宗像典哲さんが受賞されました。また、九州支部刊行の「木科学情報」誌に掲載された論文の中から優秀な論文に対して贈られる論文部門では「シロイヌナズナにおけるモノリグノール輸送体の探索」と題して九州大学の武内真奈美さんが受賞されました。受賞者の皆さま、おめでとうございます。

最後に、来年度の支部大会は琉球大学の高畠幸司先生を運営委員長として沖縄で開催される予定です。多くの方々のご参加をお待ちしています。

（支部HP） <http://rinsan.wood.agr.kyushu-u.ac.jp/>

